都留市の歴史（3）

初期農耕文化の痕跡 ―生出山頂遺跡―

紀元前四世紀頃（今から二千四百年前）になると、これまでの自然に依存した食料の獲得の時代から稲作農耕による食糧生産の時代に入りました。弥生時代の始まりです。

稲作は水稲耕作によるものであり、その技術は中国大陸から直接あるいは、朝鮮半島を経由して伝来したものと考えられています。

近年、これまで終末期の縄文土器とされてきた時期に、すでに水田経営に関わる高い技術の習得と稲の品種の改良によって、東北日本にまで水稲耕作が行われていたことが明らかになってきました。

特に、青森県弘前市砂沢遺跡で、縄文時代終末期とされていた土器に伴って水田址が発見されましたが、これは多くの研究者を驚かせました。

弥生時代における稲作農耕の発展をもたらしたものは鉄製農工具の発達でした。こうした水田経営という生産経済を基盤として弥生時代は政治的社会の出現、そして階級社会への道を歩み始めました。

弥生時代は、三世紀の後半（今から千七百年前）には古墳時代に移行しますが、この時代、普通、前期、中期、後期の三時期に区分されています。

河岸段丘が発達し、火山灰に覆われた台地が広がる当地域は、水稲耕作にあまり適さない地であったようです。

同時代の遺跡は、生出山山頂遺跡、宮原遺跡、牛石遺跡などきわめて少なく、また、発見された遺跡はいずれも中期の遺跡です。

本格的な稲作農耕社会となる後期の遺跡は、市域では発見されていません。

昭和五十五年に、厚原地区に所在する牛石遺跡で、弥生時代中期の住居址が三軒発見されましたが、これは、本市域における該期の定着的な生活を物語るものとして注目を集めました。

住居址内からは、土器と共に、縄文時代と同様、打製石斧、磨石、石鏃などが出土しましたが、弥生時代を代表する太形蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）、偏平片刃石斧（へんぺいかたばせきふ）、柱状片刃石斧（ちゅうじょうかたばせきふ）などの大陸系の磨製石斧や、穂積み具である石庖丁などは全く発見されませんでした。

また、法能の宮原遺跡でも、中期の弥生土器と共に、打製石斧、磨石、石鏃など、縄文時代と同様の石器類が発見されました。

このように、市域で発見されている弥生時代の遺跡からは、稲作農耕を示す遺物は発見されていません。弥生土器の存在を除くと到底弥生文化とみることはできず、縄文社会を継承した狩猟、採集の生活が続いたのではないかと指摘されています。

弥生土器は、縄文土器と異なり、煮沸用の甕、水や酒などの液体用や籾種の壺などによって、器形が分化するようになりました。

また、生出山山頂遺跡は、もともと生出神社の奥宮が置かれた山で、第二次世界大戦中、松根油の製作のために松根の採掘が行われましたが、その折りに偶然土器が発見され、その存在が知られるようになりました。

この遺跡は、標高七百一・四メートルの山頂に立地する遺跡で、その立地から普通の集落遺跡とは考え難く、なおさら、水田耕作を基盤として形成された遺跡とは思われない遺跡です。

墓地や祭祀場などの特殊な遺跡の存在が指摘されていますが、生出山山頂は、弥生人たちにとってどのような場であったのでしょうか。詳細については、資料編「地史・考古」、「通史編」をご覧ください。

社会教育課 文化振興係

ふるさとの歴史教室

…都留市史を読む…

昭和55年からスタートした市史編纂事業は、資料所在目録７集、資料編６冊を刊行し、終了しました。これまでの成果を踏まえて、都留市の歴史をひもとく、「ふるさとの歴史教室」を開催します。

ふるさとの歴史に触れてみませんか。

会　場　文化会館研修室
時　間　午前10時～12時
内　容　第１回　６月９日　旧石器・縄文時代
　　第２回　７月14日　弥生・古墳時代
　　第３回　８月11日　古代
　　第４回　９月８日　中世・戦国時代
　　第５回　10月13日　近世前半
　　第６回　11月17日　近世後半
　　第７回　12月８日　明治・大正期
　　第８回　１月12日　昭和期
募集人数　30名
申込先　社会教育課文化振興係

郷土博物館開設事業

郷土の画家展

市民の皆さんに親しまれる博物館づくりを目指して、構想検討してきましたが、今年度は、いよいよ建設に向け取り組んでいます。

昨年から、博物館への資料のご寄贈・ご寄託をお願いした結果、これまでに七件二千四百七十八点の申し込みがありました。

今回は、この中から、米山朴庵、田中蘭谷、旭岳麟、藤井霞郷などの郷土の画家の作品を集めた「郷土の画家展」を開催します。

期　日　６月25日～７月７日
開　館　午前９時30分～午後４時30分
休館日　月曜日と祝祭日の翌日
会　場　ふるさと会館１階　展示ホール
問合先　社会教育課文化振興係